

B型肝炎の薬物治療

核酸誘導体でウイルス減

B型肝炎になった東京都の30歳代の男性は、東京・港区の虎の門病院を受診し、抗ウイルス薬の服用を始めた。この結果、血液中の肝炎ウイルスの量が減り、肝炎も治まった。「核酸誘導体」と呼ばれる薬で、ウイルスの増殖を抑える作用がある。長期に使うとウイルスに耐性ができて効かなくなる場合があるのが難点だが、薬の種類が増え、治療の幅が広がった。（田村良彦）

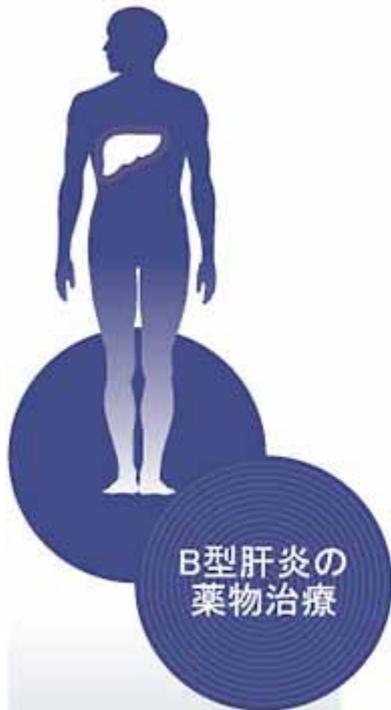
B型肝炎ウイルスの感染者は国内に約200万人。ワクチンの普及で、かつて多かった母子間の感染は激減し、新たに発症する人のほとんどは性交渉などが原因だ。

同病院肝臓科医長の荒瀬康司さんによると、C型肝炎ウイルスの場合、感染して急性肝炎を起こすと、70%が慢性化して肝炎が継続、進行するのに対し、B型では1%程度の人だけが重症化して命にかかわるものの、多くは症状が出て一時的で、いずれ鎮まる。慢性化する割合は低かった。

ところが近年、B型にも慢性化しやすいタイプのウイルスが増え、慢性B型肝炎の増加が懸念されるという。

慢性化したB型肝炎は、治療しないと年2%ほどの割合で肝硬変に進み、肝硬変になると年3%程度が肝がんに至る。荒瀬さんは「薬でウイルスの量を減らせば、肝がんの発症を抑えられることが分かってきた」と言う。

厚生労働省研究班（班長＝熊田博光・虎の門病院副院長）のB型肝炎治療指針によると、患者の年齢を目安に、薬剤を選ぶ。



B型肝炎の薬物治療

慢性B型肝炎

B型肝炎にかかった多くの人は症状が出て一時的で、沈静化するが、一部の人が慢性化する。慢性化したB型肝炎を治療せずにいると年2%程度が肝硬変に進む。さらに肝硬変になると年3%程度肝がんを発症する。

正常な肝臓



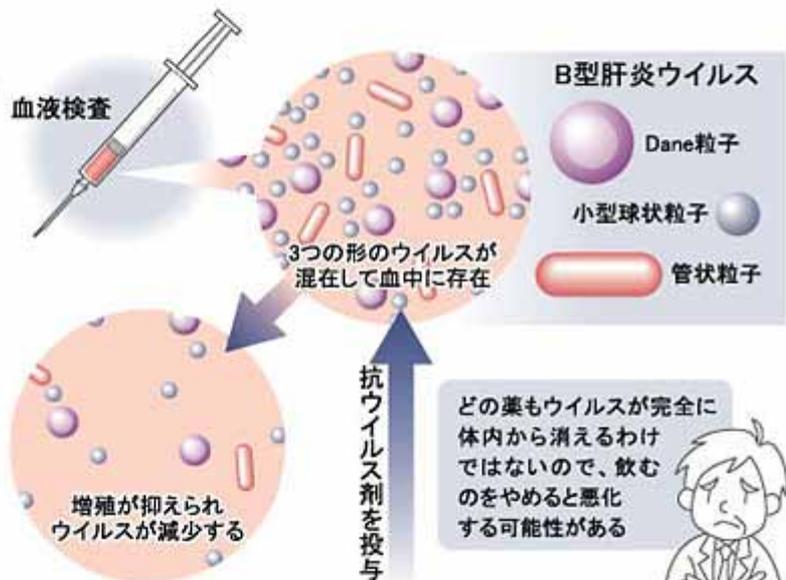
肝硬変



ほとんどの場合
自覚症状が
ありません



デザイン: 藤田 啓子



B型慢性肝炎の治療に用いられる抗ウイルス剤

一般名 (商品名)	ラミブジン (ゼフィックス)	アデホビル ピボキシル (ヘプセラ)	エンテカビル (バラクルード)
薬の1日量	100mg	10mg	0.5~1mg
適応	ウイルス量高値例 肝機能(ALT)異常例	ラミブジン耐性例	ウイルス量高値例 肝機能(ALT)異常例
耐性発生率 (初回使用)	1年で20% 5年で60%	1年で1%以下	1年で1%以下
ラミブジン耐性 への使用	-----	1年で1%以下	1年で20%
主な副作用	軽い (頭痛や倦怠感)	軽い (腎機能障害)	頭痛、上気道感染症状
日本での承認	2000年	2004年	2006年
日本での使用例	約2万5000件	6000~7000件	約250件 (承認前の治験例)

患者がおおむね35歳未満と若いと、インターフェロンが効きやすい。C型肝炎にもよく使われる薬で、本来はウイルスなどから体を守るため体内で作られる物質。人工的に作られたインターフェロンを注射する。肝炎が軽ければ、とりあえず治療は見合わせ、経過観察にとどめる。

一方、年齢が高い患者の場合、インターフェロンの効果は若い人より劣る。そこで登場したのが、抗ウイルス薬（核酸誘導体）だ。

ウイルスの遺伝子に作用して増殖を抑える働きがあり、日本では2000年、ラミブジンという薬がB型肝炎治療に初めて承認された。毎日1錠を服用し、1年間で80～90%の患者で、肝機能が正常化し、ウイルスも検出できなくなるほど減る。

ただし、長く使うとウイルスに耐性ができやすく、効かなくなる。年に20%、5年では60%ほどの患者で耐性ができ、肝炎が再び悪化する。

そこで、耐性が出た場合には、ラミブジンと、2004年に認可された薬アデホビルピボキシル（アデフォビル）を併用する。1年後に約60%でウイルスを検出できなくなる効果があるが、アデフォビルにも頻度は低いものの耐性はできる。

昨年9月には、新たにエンテカビルという薬が承認された。ラミブジンに比べ、初回の使用では耐性ができにくいとされている。ただ、頭痛や風邪のような症状が出る副作用がある。使用実績はまだ少なく、長期に使った場合の耐性の発生率や副作用なども分かっていない。

また、ラミブジンに耐性ができた患者がエンテカビルに切り替えた場合、耐性ができやすい。このため、ラミブジンの耐性には通常、これまで通りアデフォビルとの併用療法が行われる。

どの薬も保険が適用されるが、共通の弱点は、ウイルスが体内から完全に消えるわけではないので、飲むのをやめると悪化する可能性があることだ。いつまで飲み続ければよいか、今のところ分かっていない。

肝臓専門医・認定施設

日本肝臓学会は約300か所の医療機関、約3500人の専門医を認定しており、一覧は同学会ホームページで見ることができる。

<http://www.jsh.or.jp/specialist/index.html>

(2007年2月2日読売新聞)